

## 幼児期の環境教育を学んだ 学生の教育実践に関する研究

地下まゆみ\*・飯國佳代子\*\*・錦織 誠子\*\*  
日置由理子\*\*・川野 圭子\*\*

キーワード：環境教育 自然とのふれあい 保育者養成

### 1. はじめに

幼児期の環境教育の必要性について、環境教育指導資料〔幼稚園・小学校編〕<sup>1)</sup>に記載されている。環境教育として幼児期から育てたいこととして、(1) 自然に親しみ、自然を感じる心を育てる、(2) 身近な環境への好奇心や探究心を培う、(3) 身近な環境を自らの生活や遊びに取り入れていく力を養う、という3つが挙げられている。また、幼児期に経験させたい内容として、(1) 自然に親しむ経験、(2) 身近な環境に興味や関心をもち、働き掛ける経験、(3) 人やものとの関わりを深め、先生や友達と共に生活することを楽しむ経験が示されている。また、田尻 (2002)<sup>2)</sup>は幼児期には知識の伝達よりも五感を十分使った直接体験が重要と述べており、環境教育の基礎として自然体験が保育の中心となるような活動が望ましいと考えられている。しかし、自然体験の中には、科学性の芽生えや豊かな人間性の涵養など、保育において子どもの発達のために欠かせない視点を踏まえながらも、自然とのつながりや、生態学的な自然観を育むことができるような環境教育の視点が含まれている活動は多くはない。井上 (2012)<sup>3)</sup>によると、環境教育として望ましい自然観・環境観を保育に取り込むための具体的な取り組みとして、『経験の日常化・継続化』『園庭の改善』『自然に合わせる活動』『自然と人と生活を結ぶ活動』『保育者研修』の5つが提案されており、この5つの取り組みを実際に保育に取り入れるための共通点として、保育者の役割を述べている。子どもたちが環境の中で自然にふれる場合、園や園外の物的環境だけではなく、子どもに寄り添い、子どもと共に体験する人的環境、保育者や周りの大人の存在は大きいといえる。

本研究では、保育者を目指す学生が幼児期における子どもと自然環境のふれあいを計画・実

---

\*大阪大谷大学教育学部

\*\*富田林市立錦郡幼稚園

践し、その結果から幼児期の環境教育を実践できる保育者養成の在り方について考察する。

## 2. 研究方法

幼稚園・保育所・認定こども園での自然を用いた体験活動としては、野菜の栽培・収穫・調理活動、花や葉など植物を用いたクラフト活動等の遊び、ダンゴムシ・ウサギなど動物とのふれあい、土・砂・石などを用いた遊び、雨や影など気象に関係した遊びなど多様な活動が取り組まれている。今回、富田林市立錦郡幼稚園にて、①種を用いた遊び、②綿の栽培から収穫・綿繰り・綿打ち体験の植物を用いた2つの自然体験活動を全園児対象に、異年齢の合同活動として実施した。幼稚園の先生や養成校・協力施設の関係教職員が、必要に応じて園児への説明などを行う場合もあったが、主担当・補助学生として実習を終えた3回生・4回生の本学学生が担当し、自ら考え、意見しながら実践に取り組むこととした。2つの実践での活動の子どもの様子に加え、主担当が記録した活動内容や考察記録より、環境教育の視点から物的・人的環境の適切な構成、また幼児期の環境教育を実践できる保育者養成の在り方について検討する。なお、主担当は大阪大谷大学教育学部教育学科幼児教育専攻にて自然教育コースに配属し、コース修了書を取得した学生である。

## 3. 自然にふれあう体験活動

### 3-1. 種子植物とのふれあい

2018年11月29日（木）に錦郡幼稚園で環境教育の一環として、「見つけた！わかった！種遊び」と題して、本学学生1名（4回生）を主担当、5名の学生（4回生）を補助担当とし、全園児（年中・年長）を対象として行った。

主担当の学生が考えた本実践のねらいは、植物の成長過程を想像し、色々な植物の生態に興味を持ち、愛着を持って関わるようにすることとした。設定の理由は、錦郡幼稚園の子どもたちは、種子植物が花を咲かせ、実になることを園内外の植物とのふれあいから経験しているため、さらに植物の種に興味をもつことにより、植物の生命の循環を知る経験につなげたいと考えたからである。

内容は、手遊び「お寺の和尚さん」を導入に用い、かぼちゃの種をまいているということに気づくところから始めた。実際に子どもたちが種を知っているのか、そして見たことはあるのかということを確認しながら展開することとした。次に、パワーポイントを使用し、3問の種クイズを用意して、子どもたちの思考を種と花をつなげるよう展開した。1問目はタンポポの綿毛、2問目はヒマワリの種、3問目はツバキの種とした。それぞれ、子どもたちに種から育

った植物がどんな大きさや色に変化していくのか想像力が膨らむように言葉かけを行うように気を付けた。また、ヒマワリ・ツバキの種は実物を用意して、子どもたちが種の感触やにおいを感じられるようにした。

3問のクイズの後、アサガオの種の写真を見せ、子どもたちは写真の種から想像できる花の絵を画用紙に表現する活動を行った。何の種か知りたい子どもに対しては実物の種を用意するなど対応した。アサガオの種から想像した花の絵を数人の子どもたちに前にでて発表するインタビュー形式を取り入れ、子どもたちの考えを共有した後、答え合わせを行った（写真1）。答え合わせ後、この活動を実施した季節である秋に見つけることができる種や植物の生長についてDVDを用いて紹介し、子どもたちの興味や関心を高めた。くっつき虫として子どもたちが遊んだ経験のあるオオオナモミの種を紹介し、活動を終了した。



写真1 活動の様子

この活動を行っている時、子どもたちの様子は、種のことを知っていたり、見たことがある種が紹介されると、全園児が口々に「幼稚園で見たことがある」や、「果物の中にあったよ」、「土に植えたことがある」などと答えていた。種のクイズでは、タンポポの綿毛やヒマワリの種は、子どもたちほぼ全員がどんな花なのか、色や大きさなど理解をしていた。「幼稚園でみたよ」や「黄色い花」などと自分たちの知っていることを発表していた。ヒマワリの種では、実際に見て触った時に「ネズミさんが食べるやつ」と答えている子どももいた。子どもたちにとっては難しいと考えていた、ツバキの種もタンポポの綿毛やヒマワリの種の時と同様にどんな花であるか理解をしていた。ツバキの種の写真と実物を見て「ツバキや!」とすぐに答えている子どもがいた。先ほどと同様の質問をすると、「ツバキで油取ったよ」や「タンポポよりもちょっと大きい」など体験したことや気づいていたことを伝えてくれた。

アサガオの種を見てどんな花が咲くか想像して画用紙に描く活動では、種の写真を見ただけでアサガオの種だと分かっている園児もいた。しかし、実際に描いてみると、年中児と年長児では異なる絵が見られた（写真2）。年中児は、アサガオと答えをわかっているけれども本物とは異なり、花びらがたくさんある花、色とりどりの花、チューリップや種を描くなど、これまでに見たことのある「花」というひとつのまとまりと認識している様子が絵に表れていた。年中児の中には、太陽・土・雨など植物が育つ時に必要なものを描いている子もいた。年長児の絵には、アサガオの花を的確に記憶していることが表われており、花を正面からだけでなく横から見た様子を描いていたり、茎や土、そして根っこの部分までしっかりと描かれていた。

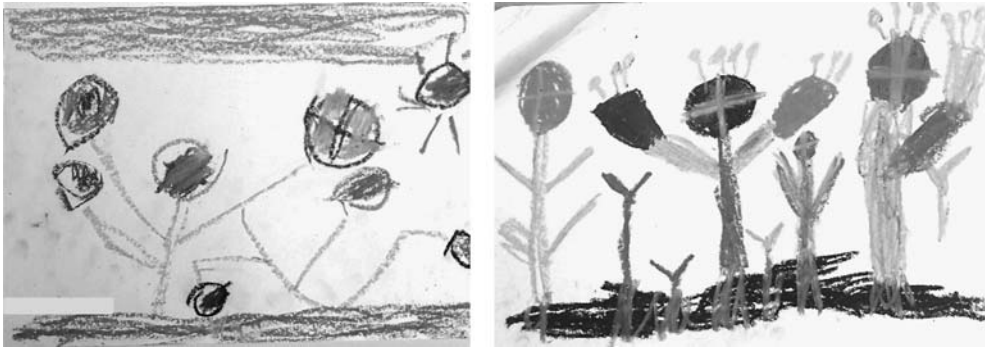


写真2 園児が描いた絵（アサガオの正面や横から見た様子、根などが描かれている）

また、植物に必要な太陽や雲なども描いている姿も見られ、花だけでなく花の周りの環境への関心が表現されていた。

この活動の実践を通して、主担当の学生は、年長児は、約2年間園生活の中で植物と触れあって過ごしており、年中児とは経験値が違うと強く感じた点や、子どもたち一人ひとり、自分の考えを持っていることにとても驚いた点を記録している。また、実践した感想として、次のように記している。

‘種から花が咲く’という一連の流れを知るだけで様々な自然環境に目を向けることができ、保育者もここからさらに話を広げることできる。そして、いま現在問題となっている環境問題に気づくことにもつながると考える。幼児期から環境について詳しく学ぶことは小学校に進学し、授業で学んだときに幼児期に学んだことと関連付けてさらに深く学ぶことができるだろう。保育をする上で環境をテーマとして行うときには、子どもたちの素朴な疑問に耳を傾け、一緒に気づき、発見をすることができるような保育をしたいと考える。

数時間程度の園児との活動ではあったが、子どもに伝えたい目標を明確にし、そのための準備を行い実践させていただいた結果、「種子植物」というひとつの自然要素から子どもたちは新たな気づきや発見をし、個々の自然要素、たとえば花と太陽、花と水、花と土、花とヒトといったつながりを絵で表現していた。また、学生もそれらの子どもの気づきや発見から幼児期における環境教育の重要性についてこれまでに学んだことを再確認するとともに保育現場での実践に向けて意欲を高めることができた。

### 3-2. 綿の栽培から収穫・綿繰り・綿打ち体験

自然体験活動が子どもに与える影響を考えるために、2019年5月から11月の約半年間をかけて、大阪府営錦織公園ならびに河内の里の職員の協力を得て、綿の植え、収穫と綿繰り・綿打ちの体験活動を実践した。対象は錦郡幼稚園の全園児である。本学学生1名（4回生）を主担当、約10名の補助学生（3・4回生）が参加した。

#### ①綿の植え

全園児とともに、錦織公園内にある河内の里に作っていただいた畑にて、綿の植えを5月24日に行った。参加した学生と子どもたちはペアまたはグループに分かれ、列をつくり、幼稚園から錦織公園河内の里までの道のりを徒歩にて移動した。参加学生は道路や山道での安全確認や、水分補給等の熱中症対策に注視しながら、子どもたちと共に山道に生えているキノコやタケノコを見つけたり、葉っぱの上にいるカタツムリを観察したりと、自然や生き物に興味を持つ様子が見られた（写真3）。河内の里に到着後、公園職員より綿の植えから収穫までを説明いただいた（写真4）。主担当の学生は、この説明の活動を取り入れたことを、「初めに



写真3 河内の里までの徒歩移動の様子



写真4 綿についての説明と植えの様子

綿の成長過程を伝えることで、収穫時の楽しみや、活動に見通しを持つことができ、写真を見せて話をすることで子どもたちがより具体的なイメージがしやすくなる。」と記録している。

説明後、畑に準備された畝に移動し、種植えを実施した(写真4)。種植えの後、子どもたちから「種植えたからお水もあげないと!」「ちゃんと芽が出るかな?」との発言があり、用意していたペットボトルなどを利用して子ども自身が綿の生長への願いを込めながら水やりをしていた。

## ② 種植えから収穫までの綿の生長

錦郡幼稚園から綿の種植えを行った錦織公園河内の里までは、子どもの徒歩で片道1時間程度は必要となる。そのため、錦織公園に植えた綿の生長を定期的に子どもたちが世話をしたり観察したりすることは難しい。綿の栽培活動については錦織公園河内の里にご協力いただき、綿の生長については、幼稚園でも綿を育てていただく一方、主担当が綿の生長の変化に応じてその状態をポスターに作成し、園に掲示いただくこととした。ポスターを幼稚園に主担当の学生が持っていく際には子どもに学生が話をする機会をいただいた。その時の子どもの様子を以下のように記録している。

自分たちが植えた綿は今どうなっているのかと早く見せてという子どもたちが多くいた。ポスターを見せながら綿の現在の様子を伝えた。また、実際に家族で公園まで見に行った子どもたちもいて、「パパとママと見に行った」「このくらいの高さやった」と話してくれた。子どもたちが見ることができない間も、このような形で伝えることで、子どもたちに綿栽培の活動を継続して行うことができた。

## ③ 綿摘み・綿繰り・綿打ち体験

白いふわふわの綿の実が畑を彩った10月24日に、綿摘みから綿繰り・綿打ち体験のため、再び錦織公園河内の里を園児全員と訪れた。5月から継続して行っている主担当の学生1名と補助学生3名が参加した。

幼稚園から畑まで往路では、幼稚園の保育で活用できるように、木の実等の様々な自然物を拾い集め、秋の自然とふれあいながら歩いた。生長した綿を見つけた子どもたちは、「すごい」「めっちゃ大きくなって」「早く取りたい」など様々な反応を示した。早く収穫したい子どもたちの気持ちを受け止めながら、摘み方や採取範囲の説明を行い、収穫を始めた。主担当の学生が記録したこの時の子どもの様子を紹介する。

最初の一つを摘むのに恐る恐る綿に手を伸ばす子どももいれば、綿の感触を楽しみなが



写真5 綿摘みの様子

らたくさん摘む子どももいた。また身長の高い年長児は、高いところにある綿を摘むように伝えることで、自分よりも背の低い園児が手の届くところで摘める等の思いやりの気持ちも持ちながら活動できるようにした。収穫を終えると、子どもたちは先生らに自分が摘んだものを笑顔で見せに行き、収穫した感想を伝えている様子が見られた。帽子についたひっつき虫は気にもならないほど、綿の収穫に真剣に取り組み、友達と採った綿の見せ合いをしている子どもの様子もあった（写真5）。

収穫後、事前に乾燥していただいていた綿を用いて綿繰りと綿打ち体験をした。実際に綿繰りと綿打ちを体験し、収穫した綿と乾燥した綿の触覚の違いに気付き、綿打ちをした後の柔らかくなった綿に触れ、「フワフワしてる」「めっちゃ気持ちいい」「あったかいね」などの子どもたちの発言があった。綿を口元に持っていき、「サンタさんのおひげ」などとふわふわの綿を髭に見立てて遊び、さらには「これが服になるんやろ」との発言もあった。子どもの反応や言動に学生は驚いたようである。この活動が終わった後、幼稚園では綿繰り機を使わずにどうやったら綿と種を分けることができるのかと子どもたち自身が考え工夫し、綿を使った制作の活動が継続されていた。

綿作りから収穫までの半年の実践を通して、主担当の学生は次のように記している。

錦郡幼稚園の園児たちとの実践も含め、自然体験活動が子どもの豊かな成長にどれだけの影響を与えているのかを実感した。子どもたちの不思議に出会い、発見した時の「なんで」、「どうして」が増えた時、科学の芽生えを感じるとともに自然への主体的関わりが生まれている。自然への関わりで大切にしたいことは、幼児期は五感を使った関わりであるということである。「今、ここにある自然」を大切にし、豊かな自然とのかかわるよりも、自然と豊かにのかかわることが重要である。都会のささやかな自然でも、季節を感じるこ

ができ、生き物の暮らしを見せてくれる。「今、ここにある自然」に目を向け、大切にすることから始めて、子どもが自然とかかわる機会の一つひとつを大切にしていきたい。

この活動は、半年間の子どもと綿のふれあいの活動であった。子どもが綿の種から綿ができる生長過程を楽しみにしている様子を直接見ることで、主担当の学生の活動に対する意欲・責任が活動を重ねる度に高まっていた。また、子どもたち自身が植えた綿の種からできた綿を摘む時の様子から、個々の園児の心情を捉えており、参加学生自身が楽しみ子どもとじっくり関わり、言動を記録できる、余裕をもった環境下での実践であった。最後にこの活動を通して、造られた自然ではなく、「今、ここにある自然」の大切さに気付き、子どもが五感を使って主体的に関わる大切さを記録している。この点においては、子どもとの数時間の活動では得られない、学生自身が数回にわたって子どもの多様な気づきや発見と一緒に体験できたことが関係していると考えられる。

#### 4. 考察

幼児期の子どもと自然をつなぐ遊びの実践は、保育者養成課程にて使用されている保育内容「環境」の教科書で多数紹介されている<sup>46)</sup>。教科書には、子どもたちが動植物や砂などにふれあっている写真、指導案が掲載され、五感を使った自然の中での遊びの必要性が述べられている。幼稚園・保育所・認定こども園では、大正時代から伝統的な保育内容として飼育栽培や戸外保育等の自然体験活動が実践され続けている。しかし、単に「花を育てた」「野菜を収穫した」だけでは環境教育の実践とは言い難い。保育者が環境教育の観点を意図的に指導計画に反映させられているかを確認する事で、環境教育の実践につなげることができる。井上・無藤(2010)<sup>7)</sup>は、東京都及び兵庫県の幼稚園・保育所を対象として、保育者が考える自然とのかかわりのねらいについてアンケート調査を実施し、保育者がねらい・内容・環境構成を含めた指導計画を立てる際には要領や指針を参考にしている場合が多く、環境教育につながる願いを個人として持っていても指導計画に反映しにくい点を報告している。本研究にて主担当の学生が計画した、植物にふれるという2つの各活動においては、植物の生長に関わる自然の要素や生物同士の関係、人間の営みである生活との関係が保育者も子どもも認識できる機会を指導計画に意識的に含めるように指導を行った。また、参加してくれる園児たちと自然との関わりの様子や園児がすでに持っている生態系に対する意識などを高めることができるよう、園の先生方の日常の取り組みを伺いながら立案した。その結果、園児が主体的に自然に関わり、新しい気づきや発見ができたことで、主担当の学生にとってもただ子どもと自然の中で、自然要素を用いて体験をするという活動ではなく、環境教育の視点を持った自然のふれあい体験につなげる



ことができたと考える。

幼児期の環境教育を実践するためには、保育者の環境観が影響する。保育者自身が自然環境に関心を持ち、その関心を子どもたちと楽しめるような環境構成が求められるであろう。本研究を通して、保育者養成としてできることは保育者を目指す学生の環境教育の実践経験の機会を設けることであり、園と養成校が連携し、子どもと自然のふれあいの様子を理解した上で、学生が子どもと自然のふれあいを実践している日常の教育・保育に参加させていただき、環境教育の視点からその教育・保育のねらい・内容を明確にする力を養うことではないかと考える。

#### 謝辞

本研究を実施するにあたり、大阪府営錦織公園管理事務所の皆さまにご協力いただきましたことに感謝申し上げます。また、活動に参加してくれた富田林市立錦郡幼稚園の園児の皆さんならびに本学卒業生・学生の皆さんにも御礼申し上げます。本研究は、大阪大谷大学特別研究費助成を受けて実施したものです。

#### 参考・引用文献

- 1) 国立教育政策研究所教育課程研究センター：環境教育指導資料〔幼稚園・小学校編〕2014.  
([http://www.nier.go.jp/kaiatsu/pdf/kankyo\\_k\\_n\\_e.pdf](http://www.nier.go.jp/kaiatsu/pdf/kankyo_k_n_e.pdf), 2020年2月5日)
- 2) 井上美智子：幼児期からの環境教育－持続可能な社会にむけて環境観を育てる，昭和堂，2012.
- 3) 田尻由美子：保育内容環境の指導における環境教育的視点について，精華女子短期大学紀要，第28巻，19-28, 2002.
- 4) 徳安敦・瀧川光治・杉浦広幸編著：生活事例からはじめる－保育内容－環境，青踏社，2016.
- 5) 大澤力編著：実践保育内容シリーズ3 環境，一藝社，2018.
- 6) 高橋貴志・目良秋子編著：コンパス保育内容環境，建帛社，2018.
- 7) 井上美智子・無藤隆：保育者の考える自然とのかかわりのねらいの実態－環境教育の観点からの分析－，大阪大谷大学教育福祉研究，第36巻，1-7, 2010.